

# 産業遺産と産業観光

——第16回国際産業遺産保存会議（TICCIH）参加報告——

種 田 明

## A Study of Industrial Heritage and Industrial Tourism

——International Conference Report: The International Conference for the Conservation of the Industrial Heritage (TICCIH) XVI Lille-Region (France) 2015. Industrial Heritage in the Twenty-First Century, New Challenges——

Akira OITA

**要 旨**：「21世紀の産業遺産、(その) 新たな挑戦」というテーマで開催された第16回 TICCIH 本会議は、“産業遺産のある地域の人びとを含む関係者に新たな展望を開くことで、産業遺産の現況の全面的かつ世界基準の再吟味、それらが達成したことおよびその認識を与えることを目的とする [主催者告示・Web 広報から]”ものであった。

本稿は、TICCIH の抄史、ICOMOS と TICCIH との関係（産業遺産の世界遺産登録）を紹介し、産業遺産と産業観光の現況、そして今後の展望に一考察を加えたものである。最後に‘ナショナル・レポート’原文を掲示した。[Web 上には、編集者により出典等を削除され、図・写真がサイズ変更されたままの不完全なものが掲示されている。また TICCIH 会長 P・マーティン／ミシガン工科大教授の要請で加筆（Web 上）した部分—‘明治日本の産業革命遺産’ 2015年世界遺産リスト登録に関連—を末尾に掲示した。]

**キーワード**：産業遺産、産業観光、世界遺産、TICCIH、ICOMOS

## 1. TICCIH 抄史

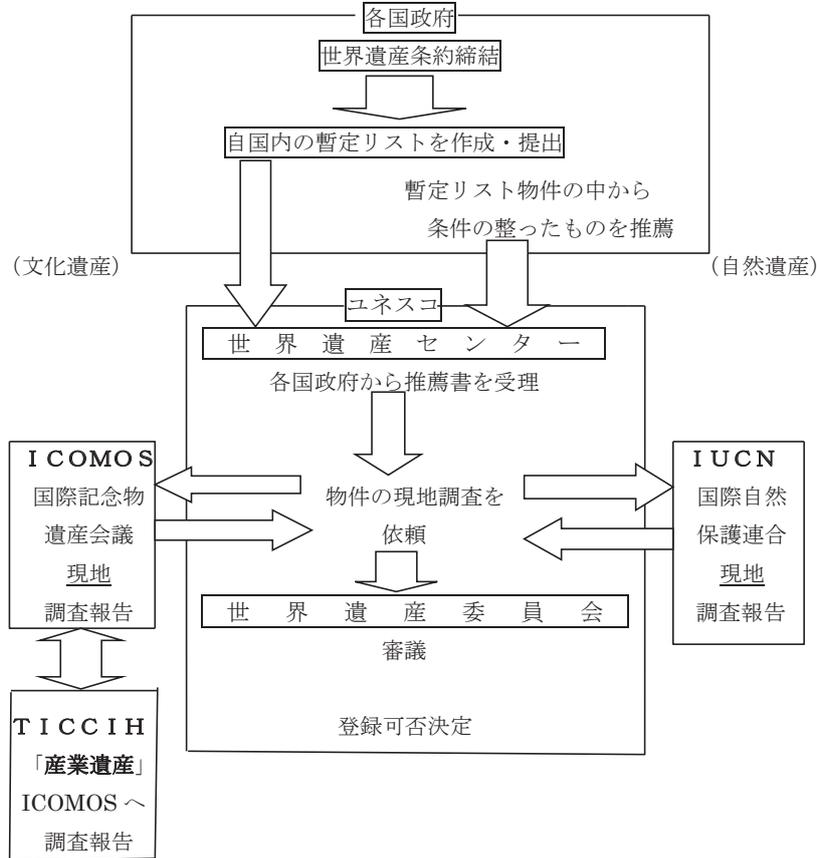
「産業考古学」は1950年代にイギリスで M・リックスにより提唱された研究分野である。この研究分野が人口に膾炙して多くの支持を集めた契機となったのは、英国国鉄の「ユーストン・アーク【1837年建設／ロンドン・ユーストン駅玄関のローマ風円柱のある建物】撤去・再開発計画」に反対し、アーク保存を求めるキャンペーンであった。イギリスでは産業革命の遺産（当時は歴史的・技術的構造物はすべて「記念物 monument」と称した）が工業化に伴い次々に破壊（スクラップ）されていくことに大きな危惧の念が生じていた。

他方、1959年からの「アブ・シンベル神殿（+フィラエ神殿）の水没からの救済」国際キャンペーンに成功したユネスコ（1946年創設）は、続く国際保護運動…ヴェニス、モヘンジョダロ、ポロブドゥールなど…にも成果を取め、1972年には世界遺産条約が発効したのである。また1975年は、イギリス観光庁が提唱した‘最初の’“ヨーロッパ記念物保護年”であった。

イギリス産業考古学協会（AIA = Association for Industrial Archaeology）は、全国各地に陸続して設立してきた‘産業考古学’研究団体・グループを統括する協会として1976年に創立した〔もっとも1964年、すでに『産業考古学レビュー』を先行刊行開始していた〕。このような動向を背景に、N・コソズ（Neil Cossons, Sir/1994）がアイアンブリッジ・ゴージ博物館トラスト（1968年設立）の初代館長（1971～83）となった翌々年、J・R・ハリス（John R. Harris：バーミンガム大学教授・経済史）、R・A・ブキャナン（R. Angus Buchanan：パース大学教授・技術史）、B・トリンダー（Barrie Trinder：シュロップ州議会成人教育オーガナイザー、アイアンブリッジ博物館評議員・産業考

古学)、R・フォーゲル (Robert M. Vogel : スミソニアン・インスティテュート機械・土木部門キュレーター、アメリカ産業考古学会 (SIA は1971年創立)) らと共にアイアンブリッジ・ゴージ (1986年世界遺産登録) で創設されたのが ICCIM (TICCIH の前身) である。[肩書きは全て当時]

表1 : 世界遺産リスト登録の流れ



『世界遺産 年報2008』 ((社)日本ユネスコ協会連盟編) 日経ナショナル ジオグラフィック、2008、p.45図を基に種田作成

コソズらの呼びかけで1973年に9カ国61人が、アイアンブリッジに参集して開催された「第1回国際産業記念物保存会議 (FICCIM = The First International Conference on the Conservation of Industrial Monuments)」は、5年後の第3回会議で改称し今日の TICCIH となったのである。(表2 (「TICCIH 本会議とテーマ一覧」) を参照)

## 2. ICOMOS と TICCIH (国際産業遺産保存委員会 Committee)

ICOMOS (国際記念物遺跡会議 : International Council on Monuments and Sites) は、1964年の「記念物と遺産の保存に関する国際憲章 (ヴェニス憲章)」を受けて1965年に設立された国際的な非政府組織 (NGO) である。加盟各国の文化遺産 (建造物含む) の調査・研究・保存・修復・管理・公開・(再) 利活用などの分野の第一線の専門家 (約6000人) や専門団体 (例えば DOCOMOMO = Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movement / 1988年設立 : 「モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織」など) によって構成されている。

1972年ユネスコ総会での世界遺産条約採択後 (リスト登録は1978年から)、「ICOMOS はユネスコをはじめとする国際機関と密接な関係を保ちながら、世界文化遺産の保護・保存、そして価値の高揚のための重要な役割も果たしてきました。文化遺産保護の原理、方法論、科学技術の応用の研究などを続けています。またユネスコの諮問機関として、世界遺産登録の審査、モニタリングの活動を続けて」(「日本イコモス国内委員会」広報パンフレット) きている。

表2：TICCIH 本会議とテーマ一覧

2015.Nov.

回	開催年	開催地/国	メインテーマ	(作表・種田)
1	1973	アイアンブリッジ/UK	「①記録システムとテクニック、②保存政策」(FICCIM)	
2	1975	ポッフム/西ドイツ(当時)	「産業考古学と産業記念物」(SICCIM) ☆日本初参加	
3	1978	ストックホルム；グランゲルデ/スウェーデン	「誰が産業考古学を担うか？」(ケネス・ハドソン) <sup>*1)</sup> ☆ TICCIM (第3回) を TICCIH に呼称変更	
4	1981	リヨン；グルノーブル/フランス	「産業考古学の価値」(TICCIH IV 1981)	
5	1984	ボストン；ローウェル/USA	「産業遺産：私たちの直接の過去への最も近い道」(マリー・ニッサー) <sup>*2)</sup>	
6	1987	ウィーン；フォルデルンベルク/オーストリア	「インダストリアル・ツーリズム、受容可能な再利用と産業遺産—如何なる政策が「可能か？」—」	
7	1990	ブリュッセル/ベルギー	「産業、人間そして景観」	
8	1992	マドリッド/スペイン	「保存・修復の基準、前時代技術による構造物の実行可能な活用法」	
9	1994	モントリオール；オタワ/カナダ	「脱工業化(Deindustrialization)、20世紀最後の10年の特徴的現象」	
10	1997	アテネ；テッサロニキ/Gk	「海事[と海運の]技術」	
11	2000	ロンドン；コーンウォール/UK	「①産業革命は産業考古学へ；②コーニッシュ鉱山伝説」	
12	2003	モスクワ；エカテリンブルグ；ニジニータジュール/ロシア	「旧産業センターの変貌と産業遺産の役割」	
13	2006	ローマ；テルニ/イタリア	「①産業遺産と都市の変容、②生産的諸地域と産業景観」	
14	2009	フライベルク/ドイツ	「エコロジーとエコノミー」	
15	2012	台北/台湾(中華民国)	「Post-colonialism & Industrialization—the Industrial Heritage of others」	
16	2015	リール/フランス	「21世紀の産業遺産、(その) 新たな挑戦」	
17	2018	サンチャゴ/チリ	—テーマ未定— (南米で初めての開催)	

《会長：J・R・ハリス(1973～81) UK / M・ニッサー(1981～90) Sweden<sup>\*2)</sup> / L・ベルジュラン(1990～97) France<sup>\*3)</sup> / E・カサネレス(1997～2009) Spain / P・マーチン(2009～(2015再選) USA)》

1990年代から、本会議と次の本会議の間に「中間会議」や「専門会議」が活発に開催されている。

中間会議2005名古屋：産業考古学会・中部産業遺産研究会と日本万博協会、愛知県・名古屋市等共催 Work-Labo 2010：初めて ICOHTEC (International Committee of History of Technology) と共催

《日本代表：大橋周治1978～80、内田星美～1990、庄谷邦幸～2000、種田明～2015、松浦利隆(岡田昌彰) 15～》

(注)※1) ユネスコ博物館顧問(当時)、著書は『産業考古学入門』(1963)の他に『世界産業考古学』(ケンブリッジUP、1979)、『空からの産業史』(同、1984)など。

※2) TICCIH 名誉会長、ストックホルム王立高等技術研究院教授(2011逝去)。

※3) TICCIH 名誉会長、パリ大学・フランス社会科学研究院教授(2015逝去)。

1980年代の終わり/1990年代初め頃から TICCIH と ICOMOS の関係・交流が始まった。折しも1994年、ユネスコは「グローバル戦略」(\*)を制定し、世界遺産リスト登録の偏重すなわち、地域としてのヨーロッパ；都市・信仰関連；キリスト教関連；先史・20世紀を除く歴史時代；優れた建築、が過剰に登録されていることを正し、比較研究が進んでいる「産業遺産」「20世紀の建築」「文化的景観」の3種別を登録対象として積極的にアプローチしていくこととなった。(下線およびゴチックは種田)

(\*)「世界遺産一覧表における不均衡の是正及び代表性・信頼性の確保のためのグローバルストラテジー(The Global Strategy for a Balanced, Representative and Credible World Heritage List)」は第18回世界遺産委員会(ブーケット/タイ)で採択された。

ICOMOS には産業遺産関連の専門家がほとんどいないことから、1990年代後半には TICCIH との相互交流が進み、TICCIH は非公式に世界遺産センターに推薦された産業遺産の調査やリスト登録の可否に関して ICOMOS から意見を求められるようになった。そして両者は「ICOMOS-TICCIH 共同原則2000」(\*\*)を調印するに至ったのである。

(\*\*)“Collaboration Agreement between ICOMOS and TICCIH: signed on occasion of the General Assembly of TICCIH during the TICCIH 2000 Conference in London 31 August 2000”: ICOMOS Secretary General の Jean-Louis LUXEN と TICCIH President の Louis BERGERON、2人が署名し即日発効。

共同原則締結に向けて TICCIH は1999年に規程(statutes: 1978年6月4日制定)を修正(1999年12月22日)し、

国際 NGO としての正式認証 (a Charity under English law n° 1079809 on 7 March 2000) を取得している。TICCIH のホームページ (<http://ticcih.org>) には、その後の「ニジニー・タジール憲章 (The Nizhny Tagil Charter For The Industrial Heritage / July, 2003)」「ダブリン原則 (Joint ICOMOS-TICCIH Principles for the Conservation of Industrial Heritage Sites, Structures, Areas and Landscapes : 前記「共同原則2000」を ICOMOS は第17回総会28 Nov. 2011において採択)」「ICOMOS-TICCIH メモランダム (ICOMOS/TICCIH Memorandum of Understanding : 10 Nov. 2014調印 : 産業遺産の保存に関する共同作業の枠組みを定めたもの)」が公示されている。

### 3. 第16回 TICCIH 本会議・総会

本会議・総会の今回開催地ノール＝パ・デュ・カレー地域圏 (州都リール) は、2012年に「ノール＝パ・デュ・カレー地方の石炭地帯」としてユネスコ世界文化遺産リストに登録されたところである。そして「その産業・文化的景観は、ニジニー・タジール憲章に示された TICCIH の原則と、ユネスコ・ICOMOS によって規定された世界遺産の基準とが合致した例証である。」(主催趣意 <http://ticcih-2015.sciencesconf.org/?lang=en> (2015.09.05検索) より。) 日本で言えば筑豊 (九州) か赤平 (北海道) のような所であった。

日本からの参加者は17名 (報告4本7名) であった。会議は、キーンノート (全体)・セッションとポスター・セッション以外に26ものセッション (若干のキャンセルを含め221本+全体・ポスター各4本、平均すると@8報告) がたてられ、4日+半日間9室に分かれて進行した。最も多数の聴講者を集めたセッションが 'UNESCO/ICOMOS/TICCIH' であったことは、1999年からの TICCIH の一連の世界遺産に絡む動きに関連・反映している。

‘産業観光’セッションでは7本の報告があった。TICCIH 本来の分科会 (セクション) は9つ (うち2つ Communications, Metallurgy は活動休止中<sup>(\*)</sup>) で、Tourism は2009年から新規に開始されたにもかかわらず、今後さらに充実してゆくことが期待できる感触を得た。産業遺産観光に世界は目を向けてきているのである。

(\*) Sections :Agriculture and Food Production ;Global/Local Group ;Hydroelectricity and Electrochemical Industry ;Mining and Collieries ;Railways ;Textiles である。

【写真1】 コンgress・ツアー「ノール＝パ・デュ・カレー地方の石炭地帯」  
(世界文化遺産) の見学



[写真・種田撮影2015.09.10]

## TICCIH Japan National Report 2012~2015

Akira OITA, Prof. of Atomi University  
National Representative of Japan

Regional revitalization policy of the Abe cabinet (Dec. 2012 ~ );

Most of regions through tourism, a few through industrial tourism

Japan Industrial Archaeology Society (acronym JIAS est. in 1977) holds annually two meetings. One is the general assembly in May of the year in Tokyo and another is the national meeting in autumn somewhere of the provinces. National meetings in the 1980s / 1990s, however, with 60~100 people attending them including some local people, have been yet recognized widely, but they played a certain role to give publicity on industrial heritage to the local community. Things, laws and ordinances concerned with cultural assets in Japan have changed greatly in the 1990s / 2000s.

And since “Iwami silver mine and its cultural landscape” was recorded on the UNESCO World Cultural Heritage List in 2007 as **the first** “World Industrial Heritage” of Japan, local communities and municipal authorities tend to count industrial heritage as leader for tourists. So that the national meeting of JIAS in 2012 was held in Niihama-city in Ehime-Pref. and the excursion to Besshi (Fig. 1).

In 2013 was it held in Toyama-city in Toyama-Pref. and the excursion to the Tateyama caldera (now a dormant volcano) and its sand guard dam(s) (Fig. 2), and in 2014 was it took place in Okayama-city in Okayama-Pref. and the visit to the Kojima-Bay reclaimed land (Fig. 3).

In the meantime (2015) “Tomioka Silk Mill and Related Sites” (Fig. 4) was registered at the UNESCO World Heritage List as **the second** World Industrial Heritage of Japan. (＊) In 2015 the national meeting of JIAS is scheduled

Fig. 1: Besshi Copper Mines in 1890



The House of Sumitomo developed a copper smelting technology called “Nanban-buki (Western Refining)” to extract silver from crude copper.

The Besshi Copper mines continued operations from 1691 for 283 years, with laying the groundwork for successes of Sumitomo’s business.

Source: <http://www.sumitomocorp.co.jp/english/company/history/> [English]

Fig. 2: Shiraiwa Sand Guard Dam



This facility (SABO Dam) was established in 1939 protecting the Toyama Plain from flood damage. In 2009 designated as the National "Important Cultural Properties" of Japan.

Source: <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/book/monthly/1301/html/f06img.htm>

Fig. 3: The triple floodgate of Hinoe-gawa (the river Hinoe)



This facility (Himon: floodgate) of red bricks and granite was constructed in 1904.

The Kojima-Bay reclaimed land make up to ca. 11000ha from 1720's (in the middle of the Edo era) to 1963, (when reclamation works finished).

Photo: A. OITA / 16. Oct. 2014

to be held on October 24 and 25 in Kashiwazaki-city in Niigata Pref., where they made their money from shipping, cotton crape, the oil industry, railways and the machine industry - there are a series of industrial heritage left in places from the 18<sup>th</sup> century to the end of the Showa era (1980's). (\*\*)

(\*)~(\*\*): P・マーティンの依頼で変更した部分 (後掲・種田文責)

Fig. 4: Tomioka Silk Mill



The first full-scale raw silk factory (established in 1872) introducing machine-reeling technology from France.  
Source: <http://worldheritage.pref.gunma.jp/en> [English]

#### Statutory protection of the Cultural Heritage (including Industrial Heritage)

You can see all kinds of Japanese Cultural Properties on web-site “Cultural Heritage Online” (see here: <http://bunka.nii.ac.jp/Index.do> [Japanese / English a part]), which is brought to you by the Agency for Cultural Affairs. And Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, shows and goes into details of Policy of Cultural Affairs in 2014 (see here: [http://www.bunka.go.jp/english/pdf/2014\\_policy.pdf](http://www.bunka.go.jp/english/pdf/2014_policy.pdf) [English]).

You all know that Japan was struck by a massive earthquake, Great East Japan Earthquake, on March 11 2011. Recovery projects in every direction including industrial heritage are now in process. About cultural heritage you can find the report, “*Progress Report of Great East Japan Earthquake Recovery. Present State of Affected Cultural Heritage*. 5 November, 2014 **Japan ICOMOS National Committee**”, that was distributed among the members at the 18<sup>th</sup> ICOMOS General Assembly in Florence (Nov. 2014).

#### Relevant to Museums

Japanese Association of Museums (JAM) was founded in 1928 and incorporated in 1940. In March 2014 there are in Japan approximately 4,000 museums, one-fourth of which are members of JAM, (if including private and/or small-scale museums, over 8,500 museums are there) with various specification from history, art, science and so on (see here: <http://www.j-muse.or.jp/en/index.php> [English]).

The Tokyo National Museum and Toppan Printing (Co.) opened the TNM & TOPPAN MUSEUM THEATER, where you can see a virtual reality technology production based on the cultural property to be jointly produced and screened since October 2007. (see here: <http://www.toppan.co.jp/en/news/search.html?page=1&lang=en&type=news&category=all&ie=u&kw=TNM%2B%2526%2BTOPPAN%2BMuseum%2BTheater> [English]) And from January 2013 on using the latest VR technology with a giant (300 inches) screen, the Theater’s navigator-guided programs offer close-up encounters with prized cultural properties. (see here: <http://www.toppan-vr.jp/mt/> [in Japanese only]) In the near future we hope this technology could be applied to Industrial Heritage Sites.

In July 2013 Japan Railway West (Co.) announced the Modern Transportation Museum in Osaka to be closed on 6 April 2014 and the Umekoji SL Museum in Kyoto also to be closed on 30 August 2015. Both museums of JR West have a formal partnership (sisterhood) with the National Railway Museum York / UK since 2000. (see here: <http://>

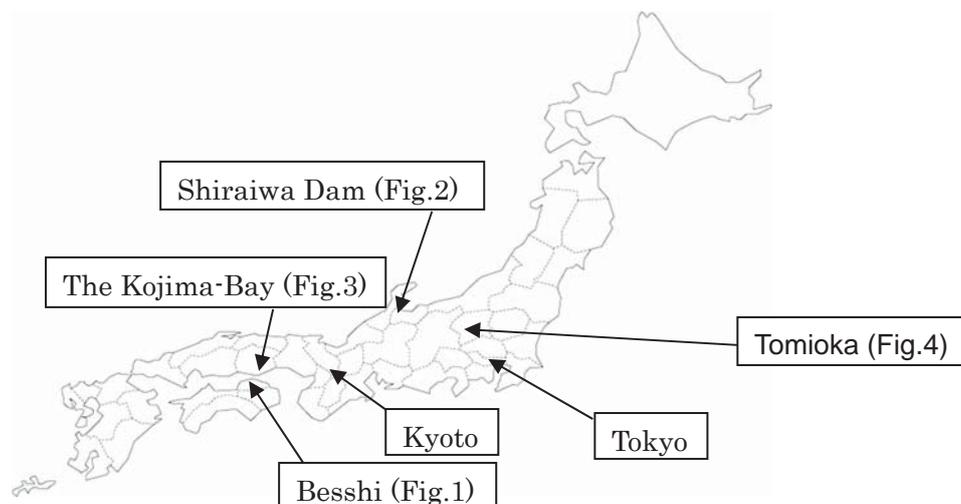
www.nrm.org.uk/AboutUs/ourwork.aspx) Exhibits of the former museum will be transferred to the latter, rebuilt and renewal of which newly named “the Kyoto Railway Museum” will reopen in spring 2016.

## Publications

JIAS published 2 books and 1 booklet, and CSIH (the Chubu Society for the Industrial Heritage, member of TIC-CIH as an organ) issued the publication of the 20<sup>th</sup> anniversary.

- (1) “Nihon no Kindai wo hiraita Sangyo-isan. Suisen Sangyo-isan 1985~2010 / Industrial heritage sites JIAS recommended 1985-2010”, Tadashi Ohashi & Kanji Tamagawa ed., JIAS Tokyo, 2011 pp.207. ISBN978-4-9905869-1-1 [Japanese]; From 1985 JIAS has appreciated industrial heritage sites, these of which were not at this time selected as national / prefectural / municipal ‘cultural property’. At the annual meeting each time a couple of sites or objects were made public and celebrated, and this book contains Industrial heritage sites JIAS recommended. So it summed up to 82 until 2010.
- (2) “Sangyo-isan Kenkyu no Genzai / TICCIH Taiwan 2012 Collected Japanese Papers”, JIAS & TICCIH Japan Committee (Akira Oita) ed., JIAS Tokyo, 2014 pp.95. ISBN978-4-9905869-1-2; This book consists of 10 papers, which were read at the 15<sup>th</sup> TICCIH plenary Congress in Taiwan. [Japanese full papers / English title and abstract accepted by the executive committee in Taiwan 2012]
- (3) “The Tateyama caldera. SABO Shisetsu no Igi to Rekishiteki-Kachi (The significance and evaluation of the facility (SABO Dam) in the history of disaster prevention)”, A record of Toyama symposium October 13 2013 (Kiichi Yoshida ed.), JIAS Tokyo, 2014 pp.43; Various facilities and systems have been established to provide protection from flood damage. Sediment and erosion control facilities, such as Shiraiwa Sand Guard Dam (Fig. 2: above), play an important role in protecting then Toyama Plain from debris flows. (RIVERS IN JAPAN 1998: <http://www.adrc.asia/management/JPN/RIVERS%20IN%20JAPAN%201998.html> [English]).
- (4) “Chubu ni okeru Sangyo-isan Kenkyu no Ayumi (The Chubu Society for the Industrial Heritage, the 20<sup>th</sup> Anniversary Memorial Edition)”, CSIH editorial Committee ed. CSIH Nagoya, 2014 pp.181+iii [Japanese, only Contents: English]. The Chubu district consists of Aichi, Gifu, Shizuoka, Mie and the southern part of Nagano Prefectures.

A sketch map of the seats of [Fig. 1] ~ [Fig. 4].



2015.04.15 A.OITA

修正 [本文中の(\*)~(\*\*)部分] : Web上では以下のようにになっている—

This year's annual UNESCO World Heritage Committee held in Bonn saw the inscription of the ambitious Japanese nomination of the Industrial Sites of the Meiji Period. It is of global significance as evidence for the first successful intercontinental transfer of industrialization from Europe to Asia, spread over 23 sites set in eight areas. The earlier mid-nineteenth-century sites demonstrate how copying from textbooks failed but a later melding of Western artisan knowledge with indigenous techniques laid the foundation of the Japanese industrialization in the early twentieth century. The concentration on iron-smelting, shipbuilding and coalmining complements the earlier inscription of the Tomioka Silk Mill, representing the textile industry. The Japanese have committed to interpreting all aspects of the inscribed sites.

会期中、リール再開発地域のエクスカージョンと世界遺産見学ツアーがあった。いずれも産業遺産を活かした‘産業観光’と見ることができる。ツアーの写真を次に示そう：

**【写真2】** 「ノール＝パ・デュ・カレ地方の石炭地帯」の  
ビジターセンターの一つ



[撮影・種田]

**【写真3】** 「ノール＝パ・デュ・カレ地方の石炭地帯」に  
なお残る“ボタ山”



[撮影・種田]

ツアーの終着は、ルーブル美術館分館の見学と館内カクテルディナーだった。国際空港のように厳重なチェックを受け入館したが、世界遺産をたっぷり堪能した1日であった。

「特筆するのがその革新的な展示方法。ルーブル・ランスには2つの展示スペースがあり、例えば「Galerie du temps (時のギャラリー)」では、ギリシャコーナーとかエジプトコーナーなどのジャンルで分けられるのではなく、紀元前5世紀の古代ギリシャの作品が、同時代のペルシャ帝国やファラオ時代のエジプトの作品と同じ空間で展示されている。これは百科事典のように作品が横並びに展示されるので、来訪者は歴史と照らし合わせながらアートを鑑賞することが可能。」(「ルーブル美術館分館 Ma chérie (マシェリ)」 <http://www.ma-che-rie.com/sanaa-louvre-lens/> (2015.11.19 検索) より)

【写真4】 ルーブル美術館分館ランス (Lens) 正面



[撮影・種田]

【写真5】 美術館の館内



(出所:「新しい視点で作品を楽しむ。ルーブル美術館の分館がランスに誕生!」<http://www.parisjoho.fr/voyage/campagne/06lens.html> (2015.11.20 検索) から)

【写真6】 ルーブル・ランス点描



[撮影・種田]

【付記】 本国際会議出張に際して「跡見学園後援会外国出張補助（平成27年度）」をいただくことができた。記して謝意を表します。